

6 海外プログラム事業部（国際協力、国際支援）

学生チーフ総括

2018年度の新体制発足直後は、実質6人のスタートだったと記憶している。マンネリ化しつつあった各企画からの脱却を図り、少ない人数ながらも尽力した。タイでのボランティアツアーはその代表例と言ってもよい。当セクションの謳い文句「Think globally, step forward ～世界を変える小さな一歩～」にもあるが、まさしくゼロからの企画立案だった。すべてが良い結果になったとはいいがたいものがあるものの、メンバー各々に何かしらの影響を残したことは明らかだった。

新体制となり半年経った4月は、新入生メンバーの獲得に奮闘した。10人加入すれば多いと予想していたが、予想の倍以上の20人を超える新入生が加入してくれた。そして、彼らを迎えてからのセクション活動は非常に盛り上がりを見せた。10月の明学国際ガールズ・ウィーク企画はその代表例と言えるだろう。その企画の立案や実施は、経験と知識を蓄えた上級生メンバーと型にとらわれない新入生のフレッシュさが、前年までの活動では見られなかった新たなセクション色を作り上げた。企画をすべて振り返るととても書ききれない。それほど今年度のセクション活動は中身の濃いものだった。

昨年12月に引き継ぎを行い、チーフを退いた。苦労もあったが、チーフの活動がなくなり一抹の寂しさを感じながら学生生活を過ごしている。新体制には彼らの持ち味である「勢い」と「柔軟な発想力」を存分に生かして活動して欲しい。彼らが、私の大好きな「ボラセン」に良い風を起こしてくれることを期待して、海外プログラム事業部のチーフ総括としたい。

（学生メンバー 法学部政治学科）

●2018年度「海外プログラム事業部」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
5/26（土）・5/27（日）	大学祭「戸塚まつり」で子ども向けペットボトルキャップ回収キャンペーンを実施（5/26：3名、5/27：4名）
10/8（月）～10/12（金）	国際ガールズ・デー企画「明学国際ガールズ・ウィーク」（32名）
10/23（火）～10/26（金）、 29（月）	ペットボトルキャップ回収キャンペーン「Cap for Treat」（10/23：11名、10/24：9名、10/25：7名、10/26：13名、10/29：8名）
2018年12月～2019年3月	国際ガールズ・デー企画「書き損じはがき・未使用はがき回収キャンペーン」（7名）

◇ペットボトルキャップ回収

目的	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアが気軽に楽しみながら身近にできることを実感してもらい、興味・関心を持ってもらう ・イベントを通して普段よりさらに多くのペットボトルキャップを回収しワクチンに換え、世界の子どもたちの健康に貢献する
場所	横浜キャンパス ボランティアセンター付近

活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・海外プログラム事業部のメンバーが回収箱を持ち、ボランティアセンター前でキャップ回収を行う ・集めたキャップを進栄化成（株）に送りリサイクルしてもらい、換金額を認定NPO 法人世界の子どもにワクチンを 日本委員会（JCV）に送る
活動日時、参加人数	2018年5月26日（土）11：00～18：00 3名、27日（日）10：00～17：00 4名 10月23日（火）11名、24日（水）9名、25日（木）7名、26日（金）13名、29日（月）8名、いずれも昼休みに実施

実施概要

5月の戸塚まつりでは主に地域の方を対象に、10月のハロウィンイベントでは横浜キャンパスの学生を対象にペットボトルキャップ回収の呼びかけをし、収集した。ペットボトルキャップは約860個でポリオワクチン1人分相当の20円になること、回収業者がキャップをリサイクルし、売却した利益によってワクチンが作られ支援国の子どもたちのもとへ届く流れを説明するなど、積極的に声かけを行った。10月はハロウィンにちなみ学生メンバーが仮装をして呼びかけを行い、キャップを持ち寄ってくれた方にはお菓子をプレゼントするなど学生たちに興味を持ってもらうよう努力した。事後にはキャップの個数を数え、キャップから作られるワクチンの量を計算しボランティアセンターに掲示した。



感想・活動を通して得た学び

積極的に声かけを行い、キャップ一つからでもボランティア活動に参加できることを知ってもらったことで、普段の活動で挙げられていた“一部の人がしか参加できていない”という問題の改善につなげることができた。10月のハロウィン時には多くのメンバーが仮装をして呼びかけを行ったため、より学生の興味を引くことができ、イベントと結びつけることで楽しくボランティア活動を広めることができた。学生への呼びかけや回収を通して、声かけという地道な活動が、遠く離れた国の子どもたちの健康につながっていることを考え、活動を見つめ直す良い機会となった。

今後に向けて

5月の戸塚まつりでの活動ではペットボトルキャップ回収、またキャップがワクチンに換わることのお知らせができた。10月のハロウィンでは目標の7,000個を達成し、7,744個のキャップを回収することができた。一方でお持ち寄りいただいた人数は少数であり、参加が限られた人たちだけになってしまった。より多くの人へのキャップ回収の周知が課題である。今後、イベントと絡めてキャップ回収を行う際には、事前の告知や普段のキャップ回収活動の広報を心がけたい。例えば、SNSを利用し学内のみならず学外、地域の方にもお伝えできると良いだろう。

(学生メンバー 経済学部経営学科)

(学生メンバー 心理学部心理学科)

◇明学国際ガールズ・ウィーク & 書き損じはがき・未使用はがき回収

目的	学生に国際ガールズ・デーについて知ってもらうだけでなく、企画に主体的に参加することで社会問題への関心を深めてもらう
場所	横浜キャンパス：インターナショナルラウンジ、図書館、ボランティアセンター、 commons 8、食堂 白金キャンパス：食堂
活動内容	ピンクレモネード販売、外貨募金、関連本展示、書き損じはがき・未使用はがき回収
活動日時、参加人数	明学国際ガールズ・ウィーク：2018年10月8日（月）～12日（金） 書き損じはがき・未使用はがき回収：2018年12月～2019年3月 32名

実施概要

2018年10月8日から12日を明学国際ガールズ・ウィークと定め、公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパンの「学生によるファンドレイジング活動」に参加し、フリープランとしてピンクレモネード販売、外貨募金、関連本の展示を行った。12月以降はその活動の一環として、書き損じはがき・未使用はがきの回収を行い、学外からの郵送も受け付けた。活動による寄付金は、プラン・インターナショナルのバングラデシュの「少数民族の女性たちの収入アッププロジェクト」に届けられた。



感想・活動を通して得た学び

早くからSNSや三角ポップなどで広報活動を行ったことで、多くの学生や大学職員に関心を持ってもらい、企画に参加してもらうことができた。ピンクレモネードの販売は予想以上の反響で、5日間で574杯を売り上げた。購入が寄付につながるという手軽さが企画成功の鍵になったと感じる。また、企画を通して活動メンバーが世界の女性問題について知識を深め、自分たちには何ができるのか思索する機会にもなった。活動をメディアに取り上げてもらう機会があり、海外プログラム事業部の活動を学外にアピールすることができた。

今後に向けて

今回の企画は、書き損じはがき・未使用はがき回収を除き学内のみで行われた。来年度はシンポジウム開催や他大学との協力など、企画の幅を広げ、学外の人も参加できるようにしたい。広報に関しては、ピンクレモネード販売の宣伝と外貨募金・関連本展示の宣伝のバランスが取れていなかった。広報の仕方についても検討し工夫していきたい。また、より良い企画を作るために活動メンバーの勉強会なども実施していきたい。

(学生メンバー 法学部政治学科)

◇学生による自主活動

タイボランティアツアー

2018年9月11日から19日、ボランティアセンター学生セクション・海外プログラム事業部の12名のメンバーでタイ、チェンライを訪れた。

現地では、山岳民族の生活向上と伝統継承を目的としたNGO ミラー財団の短期ボランティアプログラムに参加した。

アカ族の村に5日間滞在し、中学校での異文化交流活動（折り紙や習字）や幼稚園の壁にペンキを塗るボランティア、村の生活体験をした。

活動を通し、メンバーは村の生活力に驚いた。村一体で大きな家族のようなコミュニティができあがっており、自給自足の形が成り立っていた。少数民族ならではの問題を目の当たりにしながらも、元気いっぱいの子どもたちに圧倒された。

渡航前には、理解を深めるために事前学習を行い、帰国後はメンバーの学びをまとめた報告書を作成した。

(学生メンバー 国際学部国際学科)

※報告書はボランティアセンターで閲覧できます。